HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	父の軍歴 息子の語れる
Author(s)	逸見, 勝亮
Citation	ほけかんだより, 99, 1-2
Issue Date	2009-11-27
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/42491
Type	article
File Information	Hemmi_hokekan99.pdf



Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

2009. 11. 27

ほけかんだより
北海道大学保健管理センター　第99号

父の軍歴　息子の語れる

理事・副学長　逸 見 勝 亮

◇1914年9月10日生まれの父三谷幸雄は、満20歳になる年すなわち1934年の4月から7月の間に徴兵検査を受けた。母方の祖母は「背が低く甲種にはなれなかった。」と言ったが、検査結果は伝わっていない。訊く機会を持てぬうちに、仲の良かった父の次兄は他界した。1963年に父の郷里（福井県坂井郡細呂木村、現あわら市）を訪ねた時には、祖母も長兄も健在であったが、20歳の僕に父の閲歴をあれこれ訊ねる素養は備わっていなかった。20年後に訪ねた時にふたりは既に亡く、父の姉は「やさしい人だった」とほほえむばかりであった。

母からは、「教育召集だったから、短くて済んだと言っていた。」と聴いた。

◇「陸軍兵籍」簿をもとに作成した「三谷幸雄様の軍歴」（北海道庁提供）によれば、陸軍が父に召集令状を発したのは、1937年9月中旬である。日本製鋼所室蘭製作所に勤めていた父は、急遽旅装を整え寄宿していた伯母の家で記念写真《写真１》を撮り、御崎駅を発った。1937年9月16日に第九師団輜重兵第九聯隊補充隊第二中隊（金沢）に配属された。まず、駄馬による武器弾薬や食糧その他の軍用物資輸送の任にあたる輜重兵特務兵としての訓練、それももっぱら徴用馬（農耕馬）を軍用駄馬とするための訓練と馬の世話に従事したと思われる。輜重兵第九聯隊に召集された5,174人と馬4,033頭のなかのひとりである。23歳であった。

《写真１》



室蘭市御前水町の叔母宅で。
１９３７年９月１０日頃。

道庁提供資料に『追憶　金沢輜重兵聯隊』（金沢輜重兵会、1976）、『輜重兵史』上巻（輜重兵会、1979）、「第九師団作戦経過の概要」（『現代史資料』9、みすず書房、1964）を重ねて判明した父の軍歴はおおよそ以下のようであった。北海道庁提供資料中の地名には下線を施した。

◇父の中隊は1937年10月17日に神戸港を発ち、10月21日には中国呉淞港（上海北方、揚子江・黄浦江合流点から黄浦江上流約4㎞の右岸）に上陸し、同日中に姚家宅まで行軍、２３日に同地に在った第九聯隊本部に編入となった。同日輜重兵特務兵240人とともに、第九師団司令部（李家宅）の各種補給業務に従事する臨時特務隊に配属された。

◇以後父は第九師団司令部とともに行動した。第九師団は、1937年11月1日に蘇州河右岸張家宅、11月15日に崑山、11月19日に蘇州、11月27日に無錫、11月29日に常州、12月13日に南京を占領した。12月下旬、第九師団は蘇州へ移動、太湖北東岸一帯に展開し、1938年5月初旬には徐州作戦に従い蘇州を出発、5月18日に蕭県城占領、5月20日には徐州に至った。5月29日蚌埠に終結後、蘇州・無錫・常州一帯の警備に就いた。武漢作戦の一環として、8月24日に瑞昌占領、10月8日に排市附近で富水を渡河し、10月21日に三渓口に至った。10月27日に賀勝橋鎮附近で粤漢鉄道を遮断し、11月13日には岳州一帯に展開した。この後師団司令部は蒲圻に在って粤漢鉄道沿線の警備に就いた。

◇1939年1月24日、父は、病を得たのであろう、岳州に在って粤漢鉄道沿線警備・宣撫工作を主任務としていた輜重兵第九聯隊に戻された。第九師団は6月8日に帰還を命ぜられ、輜重兵第九聯隊も6月17日から逐次揚子江を下り、6月下旬から７月初旬に広島県宇品港に上陸、7月13日に復員を完了した。ところが、父は聯隊の帰還に先だって岳州を発ち、南京を3月20日に経由し、3月28日に宇品港に上陸し、4月6日に金沢で召集解除となった。この間に1937年10月29日には輜重兵特務二等兵に、1938年4月1日には輜重兵特務一等兵《写真２》に、1939年3月24日には輜重兵一等兵になっていた。ようやく室蘭へ帰ったのは4月25日であった《写真３》。除隊後、1940年4月29日には勲八等白日桐葉章を授与され、9月15日には一等兵となっている。

《写真２》



裏に父の筆跡で「昇進記念（四月一日付）」とある。撮影場所は判読不能だが太湖あたりか。

◇第九師団は、呉淞・上海に上陸した9月27日から南京を完全に制圧する12月27日までの間に、戦死者4,293人、戦傷者9,863人と師団将兵の半数を失い、20人内外となった中隊（戦時定員250人）も少なくなく、戦闘は苛烈であった。一方、蘇州では約1千名の「敗残兵を殲滅（せんめつ）」、南京では7千余の「敗残兵を殲滅」している。師団司令部は前線からはやや遠いが、父もこの過程に在ったことは確かである。

《写真3》



伯母宅の前で。襟章は一等兵のものである。裏に長兄宛に「昭和十四年四月二十五日写　三谷幸雄様帰還記念」とある。差出人は不明。福井の実家にあったものを僕が譲り受けた。

◇父は、輜重兵として1年5ヶ月中国戦線（江蘇・江西・安徽・湖北・湖南各省）で 2,000ｋｍ以上の距離を物資を運搬して移動した。「輜重輸卒が兵ならば、チョウチョトンボも鳥の内」、「輜重輸卒が兵ならば、電信柱に花が咲く」と、輜重兵は軍隊内外で侮蔑・揶揄され続けていた。除隊後消化器系の病に苦しんだ父は、軍歴を誰にも話さなかった。しかし、我が家に一等兵の襟章を付した軍服はあったから、軍歴を隠すことは不可能であった。「教育召集」は父の方便である。

◇1948年3月24日、父は腸閉塞で亡くなった。徴兵制度がなければ、長く生きたはずである。母の背中越しにカーキ色の厚地の軍服を見たのは、1954年秋であった。再婚を前にして「処分」するために箪笥から出していた、明るい陽射し中の光景である。軍服の行方はわからない。